

東京春祭 歌曲シリーズ vol.33

クリスティアン・ゲルハーヘル(バリトン) &
ゲロルト・フーバー(ピアノ)

曲目解説

《白鳥の歌》は、《美しき水車屋の娘》、《冬の旅》とともに、シューベルトの「三大歌曲集」として知られているが、《白鳥の歌》は、作曲家の死後、出版商のハスリンガーによって編集・出版されたものである。3人の詩人の詩に作曲した14の歌からなり、内訳は、レルシュタープの詩が7曲、ハイネの詩が6曲、そしてザイドルの詩が1曲。

まずはレルシュタープの7曲から(レルシュタープはベートーヴェンに8篇の自作詩を贈ったが、楽聖の死後、それらが何らかの理由でシューベルトの手に渡った)。「第1曲 愛の便り」は、「僕はすぐに帰るから」と、家路を急ぐ想いを小川に託す。ピアノが小川のせせらぎを描写する。「第2曲 兵士の予感」は、「いつかまた会えるから、君も安心してお休み」と、戦場にあつて恋人を夢想する。「第3曲 春の憧れ」は、春を求めて涙を流しながらさすらう。「君こそは春」と、切ない。「第4曲 セレナーデ」は、お馴染みのメロディに乗せて、「君を呼ぶナイチンゲールの声が聞こえないのか?」とささやく。「第5曲 わが宿」は、荒涼とした心象風景を猛々しく歌う。「第6曲 遠い国で」では、前曲に続いて、世捨て人の絶望が吐露される。「第7曲 別れ」は、街に、恋人に、星に……この世のすべてに「Ade!(さらば!)」と明るく別れを告げる。

ハイネの詩では、世界観が一変する。「第8曲 アトラス」は、世の不条理をギリシア神話の巨人神アトラスになぞらえて歌う。全世界の不幸を背負った身は、怒りと悲しみに震える。「第9曲 彼女の肖像」は、「もう君に会えないなんて!」と、未練にひたる男の嘆き。「第10曲 漁師の娘」は、「こっちへおいで」と漁師の娘を誘惑する。本曲集では例外的に軽い歌? 「第11曲 都市」は、一転して、別れの場面。ヴェニスにも似た街を小舟に乗って進む。「第12曲 海辺で」は、「哀れな女が涙に毒を盛った」と、やつれた男が嘆く。「第13曲 影法師」は、かつての恋人の家の前に佇むドッペルゲンガーを見た「私」。魂の彷徨を歌う。

本来の《白鳥の歌》は、恋文を届けてくれた忠実な伝書鳩を歌うザイドル作詩の「第14曲 鳩の便り」で結ばれるのだが、本公演では、同じくザイドルの詩にシューベルトが音楽を付けた4曲が加えられる。断ち切れない思いを切々と歌う「憧れ(Sehnsucht) D879」、さすらい人の歩調が巧みに描かれた「さすらい人の月によせる歌(Der Wanderer an den Mond) D870」、窓辺で月夜を眺めながら物思いに耽る「窓辺に(Am Fenster) D878」、澄んだ夜空のもと真実の愛を歌う「野外で(Im Freien) D880」である。